

9月例会

メンバースピーチ

身近な会員相互の交流、情報交換の場として、毎月タイムリーな話題をテーマに実施されるKVBC例会。暑さもようやくゆるみ、涼しさが感じられるようになった9月例会では、会員企業の中から自社紹介や新規事業などについてお話しいただく「メンバースピーチ」が開かれました。

国家ライセンスを生かして形のある仕事を

(有) ムライ電機 村井迪夫 氏

私は以前、京都の三菱重工に23年間勤務しておりました。そこで電気保全や電気設備関係の仕事を手がけていました。家庭の事情もあったのですが、いずれ自分で何かやってみたいという強い気持ちがあり、思い切って脱サラして、早いもので17年あまりたちます。現在の主な業務内容としては、一般的な工作機械の電気設計・保安全管理のほか、機械の制御盤のプログラミングなどを行っています。三菱にいる間は、電気主任技術者をはじめ、ボイラー技士、消防設備士、情報処理、LPGガスなど、さまざまな国家資格を取得しましたので、今後は法定点検などを含めた幅広い仕事を手がけていきたいですね。それに関しては、自分一人ではできないので、みなさんのご協力を得ながら頑張っていきたいと思っています。

さて、いまあらためて過去を振り返ってみますと、自分の作ってきたものが形として何も残っていない。これまで、人に負けるのが嫌いで、とにかく無我夢中に頑張ってきましたが、電気畑以外の方とは交流がなく、「人の振り見て我が振り直せ」ということができませんでした。そこでKVBCに入会させていただき、異業種のみなさんと親睦を深めることによって、最近ようやく自分の形となるものが見えてきたかなという感じがします。

現在、私がオリジナルで製作しているのは、一つはプリント基板のパターンの「やせ」が問題になっているので、プリント基板にLED（発光ダイオード）を取り付けまして、やせた部分に微弱の電流を流すことによって、不具合の状態がアナログで見えるようにする仕組みです。プリント基板に不具合があると、ユニットごと交換したり、その中身の石を取り替えたりと大変な作業が必要になってきます。そこで、回路チェッカーさえあれば、どこが悪いのか一目で分かるので、交換作業も楽になるのではないかと考えています。

私がいままでの経験の中で学んできたことは、「自分に忠実に、自分に真面目に、そして世間に正直に」ということです。これが、私自身の仕事の糧になっています。ムライ電機はKVBCに入会して、こんなに素晴らしいものを作ったんだなといわれるように頑張っていきたいと思います。また、みなさんから「これができるぞ」ということがあれば、ぜひアドバイスしていただければうれしく思います。仕事には絶対の自信を持っていますので、今後ともどうぞよろしく願います。

物事をひねって見る心を忘れずに

ハイデック（株） 井口熱 氏

東京に「21世紀構想研究会」というグループがあります。前東大総長の吉川さんやノーベル賞をもらった利根川博士らが発起人となって設立されたNPO団体ですが、私もそこに入会させていただいております。新内閣が発足し、聖域なき構造改革が叫ばれる中、私たち中小企業のメンバーが中心となって、草の根で行政改革を推進していこうと、さまざまな角度から研究活動に取り組んでいます。

これまで、何百年の間に築かれてきた日本の古い慣習や組織、システムは、明治維新や二度の世界大戦を経ても決して変わりませんでした。いまになって、ひょっとしたら世の中は変わるのではないかと、みんなが思うようになりました。いざそのときになって、本当に世の中の変革を受け入れるのか、それとも変わらずに守り続けるのか、非常に辛い選択を迫られるときがそこまで来ています。

「ロケットが上がるか、下がるか」。日本の宇宙開発事業団が打ち上げたロケットは一度は太平洋の海底3000mに沈みましたが、それをわざわざ深海から探し出してきて二度目の挑戦で見事打ち上げに成功しました。研究会のメンバーの一人で、元東大工学部教授の畑村洋太郎という先生が、「失敗学」なる学問を提唱しているのですが、この失敗こそ、ベンチャー企業にとって、最高のチャンスになるのです。失敗の中に秘められている真実をきちんと検証すれば、必ず次のステップにつながります。失敗したことを隠そうとするから、後になってリコールだとか信用の失墜だとか大騒ぎになってしまう。このロケットにしても、失敗した原因をとことん追求したからこそ、次のステップに生かされたわけです。

特に京都は、古い歴史の中で、ものを見る目が養われているといわれます。しかし、果たしてそうでしょうか。もうひとひねりして物事を見れば、それが仕事になるということが、まだまだ私たちの周りにいくらでも転がっているのではないのでしょうか。いままでの延長線上で儲けようという甘い考えでは、恐らく厳しい競争社会を勝ち残っていけません。「こんなことで儲かるの?」ということが商売につながるものです。私たちが食の分野で取り組んでいるのも、そういう発想に基づいてです。

読売新聞の元論説委員で、研究会の幹事をされている馬場錬成さんという方が、『大丈夫か、日本の特許戦略』という本を出版されましたが、その中に「とにかく特許をどんと申請して、モノづくりの肝心な部分を押さえていくべきだ」と書いています。私自身も、日本だけでなく、アメリカやヨーロッパで多くの特許を取得しましたが、いまあるものをセオリーどおりに使うのではなく、少しだけひねって考えてやると、いろんな属性が出てくる。こういう部分は私たちがもっとも得意とする分野です。21世紀社会はモノづくりの時代、技術者の時代を迎えました。まさに、ベンチャー企業にとって大きなチャンスが訪れようとしているのです。

中でも、金型の世界は、いまではハイテク化が進み、昔に比べて非常に複雑なものが作れるようになってきました。たとえば、新宿にある「インクス」という会社では、携帯電話の金型を非常にたくさん作っていますが、CADで取り込んだデータをオンラインで蒲田の工場へ流すと、すぐに機械が動くシステムになっています。人間がやる仕事は、機械が正しく作動しているかどうかの監視だけです。自動車業界では、モデルチェンジすれば金型変更の経費などで最低でも200億円や300億円はかかりますが、この会社ではわずか1週間で金型の変更をいくらでも実施できるようになっています。競争の激しい携帯市場で勝ち残っている仕組みをつくっているわけです。

私の会社では食品関係を取り扱っているのですが、その商品は上場企業のブランド商品として使用されています。最近では食品業界でも、HACCP（ハセップ）などの厳しい管理基準が適用されていますが、大手企業はベンチャーが持つ独自のアイデアや卓越した技術に期待をかけています。ですから、大手企業に製作を依頼しても、引き受けてくれる独創的な技術開発が必要です。それが今後の成功のポイントになってくると思います。あとは失敗を恐れず、どんどんと新しいことに挑戦していけばいいのです。

ロケットは、調子が悪いからといって、車のように途中で止まるわけにはいきません。私たちベンチャー企業も、このロケットのように上がるか、下がるかの選択しかないということを実際に考えながら事業に取り組んでいく必要があるのではないのでしょうか。